



◎校訓は「自律・和敬」。師弟同行の課外講習、個別面談の充実など、生徒一人ひとりを大切にする教育を行う。学力の蓄積、進路意識の高揚を柱とするグローイングアップ・プランに取り組み、未来を切り拓く人材の育成を目指す。

設立

1975(昭和50)年

形態

全日制/普通科・理数科/共学

生徒数

1学年約200人

10年度入試合格実績(現浪計)

国立大は、岩手大、東北大、山形大、福島大、千葉大、東京大、岡山大、宮城大、高崎経済大などに110人が合格。私立大は、東北学院大、青山学院大、慶應義塾大、東京理科大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大などに延べ241人が合格。

住所

〒982-0832  
宮城県仙台市太白区八木山緑町1-1

電話

022-262-4130

Web Site

<http://mukaiyama.myswan.ne.jp/>

宮城県  
仙台向山高校

進路学習の再構築

# 2年生での 「志望理由書」作成を軸に 生徒に徹底的に考えさせる

変革のステップ

背景

◎生徒の進路意識が希薄で、大学入学後の不適合が見られた。進路指導は体系的でなく、年度により進路実績に差があった

実践

◎「志望理由書」を軸とした「向陵プラン」で生徒の進路意識を醸成し、「進路シラバス」で教師の目線合わせを行う

成果

◎生徒の進路意識が高まる。「向陵プラン」に意義を感じる教師が増える

STEP 1

STEP 2

STEP 3

進路意識の希薄化が  
大学入学後の不適合を引き起こす

宮城県仙台向山高校が「総合的な学習の時間」(以下、総合学習)の改革に着手したのは、7年前のことだ。2004年度に赴任した三文字和史先生は、3学年担任として進路指導に当たるうちに、生徒の進路意識があまりにも希薄であることに気付いた。

「例えば、東北大の工学部に行きたいという生徒に、理由を聞いても明確な答えが返ってきませんでした。単なるブランド志向、あるいは偏差値や地理的条件に基づく大学選択に過ぎず、自分の将来まで深く考えていないことが分かりました」

ブランド志向でも志望実現に向けて最後まで頑張れるのなら良いが、そうではなかった。進路指導部長の高橋雅彦先生は、目的意識が希薄な生徒のもろさを指摘する。

「どうしてもこの大学に入りたいという強い動機があれば、勉強がたらくても頑張り抜くことができます。明確な志望理由がない生徒は、追い詰められると踏ん張り利かず、すぐに志望を変えてしまいます。また、目的意識が強い生徒は、入学した大学が自分のイメージと違って、良いところを探して適応しようとしても、そうでない生徒は『こんなはずではなかった』といって後悔する。充

実した大学生活を送るためには、「なぜ大学で学ぶのか」を知る必要があるのです」

課題は、生徒の進路意識だけではなかった。教師にも3年間を見通した進路指導の視点が不足していた。教師のスキルや意識によって指導が異なるため、進路実績は年度ごとに差があった。教育の質保証の面からも、生徒に大学で学ぶことの意味を理解させ、進学意欲を高める、体系的な進路指導の構築が急務となっていた。

## 大学合格だけでなく、社会に貢献できる人材の育成を目指す

同校は、進路指導改革として、まず総合学習



宮城県仙台台向山高校  
**高橋雅彦** Takahashi Masahiko  
教職歴22年。同校に赴任して7年目。進路指導部長。「やれば出来る」ということを、生徒に伝えていきたい」



宮城県仙台台向山高校  
**三文字和史** Samonji Kazushi  
教職歴18年。同校に赴任して7年目。進路指導部副部長。「主体的に行動できる生徒を育てたい」



宮城県仙台台向山高校  
**穂積 暁** Hozumi Satoru  
教職歴14年。同校に赴任して6年目。進路指導部副部長。「困難を避けず、克服しようとする強い向上心を持った生徒を育成したい」

の見直しを断行した。進路指導部副部長の穂積暁先生は、当時の課題を次のように振り返る。

「それまでの総合学習は、模試の振り返りや進路講演会など、個々の指導は充実していたものの、単発の取り組みで終わり、生徒の意識を啓発しきれていませんでした。担任にとつても目標が見えず、徒労感だけが蓄積していくという状況でした」

こうした課題の下、3年間の総合学習を再構築した。それが「向陵プラン」である。大学合格だけを目標とせず、大学入学後に求められる力、実社会に貢献できる人材の育成を目指すプログラムだ。2年生の末に行う「志望理由書」の作成を山場とし、その前後で何をすべきかを考え、体系化していった。

1年生のテーマは「社会とつながる」とした。社会研究や職業研究などを行い、社会貢献の観点から職業とそれにつながる学問の意義を考え「ウィンターセミナー」（2月実施）では、キャリア教育を支援するNPO法人の協力を得て、社会で活躍する50〜60人を講師に招き、生徒と語り合う場を設けている。

「社会人との対話を通して、自分も社会の役に立てるかもしれないという自己肯定感を育むことが狙いです。未来の自分に対して期待を持ち、進路に対する前向きな姿勢を育てたいと考えています」（三文字先生）

## 「志望理由書」の作成を通して将来の志望を焦点化する

2年生では「学問を知る」がテーマとなる。学部・学科研究で自分の関心のある学問分野について調べ、夏にはオープンキャンパスに行き具体的な大学像をつかむ。更に、大学教員を招いた「向陵セミナー」で学問分野に関する講演を聞いて志望分野への見識を深めてから、3学期に「志望理由書」を書く。

「志望理由書」は次の手順で作成する。まず第1志望の大学・学部・学科を決め、「志望するきっかけ」「学べる内容」「社会的な意義」など一問一答形式の「ワークシート」（P.18図1）に取り組む。12月にオリエンテーションを開いて書き方を指導し、年内に提出させる。担任は「志望理由が曖昧である」「学べる内容と社会的意義がずれている」など、生徒の理解が浅い部分をどんどん指摘し、何度でも書き直しをさせる。そして「ワークシート」が完成すると、それを基に800字前後の「志望理由書」を書く。もちろんここでも担任のチェックが入る。多くの場合、2回以上の下書きを経て、清書がようやく完成するのは年が明けて2月のことだ。

「生徒は3か月にわたり、自分の将来について悩み、調べ、考え抜く。担任との対話を通して、自身の志望を明確にしていく過程こそに意味があるのだと思います」（高橋先生）

図1 志望理由を書くための「ワークシート」

→12/21(月)提出

ワークシート①「志望学部・学科を選ぶ理由(根拠)を深める」

2年 組 番氏名

志望する学部・学科名

志望理由を持ったきっかけ

その学部・学科で学べる内容。

学問内容が社会にとってどのような意義(役割)があるのか。

具体的にどんなことを研究したいのか。

その他(取得できる資格、卒業後活躍できる分野や職業など)

\*学校資料をそのまま掲載

に挙げた学問分野に関する課題研究を行い、学問と社会のつながりを考え、自分の志望をより明確にすることが狙いだ。

研究テーマは、生徒が志望分野に基づいて個別に設定するが、内容が近い場合は、クラスを超えてチームを編成し、共同研究をする。他の生徒とテーマが重ならない場合は一人で研究に当たる。あくまで生徒自身

「提案型ともいえる進路指導が、本校のスタンズです。生徒や保護者任せの『放任』でもなく、進学実績を達成するための『学校からの『強制』でもありません。『なぜこのように考えるの?』『こういう道もあるよ』と、生徒にどんどん声を掛けます。さまざまな選択肢を提示し、漠然とした考えを整理させながら、最終的に生徒の主體的な決定を引き出していくのです」(穂積先生)

## 課題研究で 生徒の学問への意欲を高める

3年生のテーマは「自分を知る」だ。「サクセスタイム」という取り組みの中で、第1志望

希望したテーマに取り組みのが基本である。4月に研究を始め、9月中旬に最終報告会を行うが、その3か月後の12月まで研究を深める時間を設けている。「もっと調べたい」という生徒の意欲に応えると共に、研究はあくまで学問を深めるためにあり、報告会のためではないと意識させる工夫でもある。

「サクセスタイム」は、自分の志望が将来の夢や希望する職業と合致しているのかを確認する機会にもなっている。

「研究を進める過程で、『志望理由書』に挙げた志望を変える生徒が出てきます。課題を調べるうちに、志望と『社会の課題』とのずれを認識するのです。心理学を希望していた生徒が、自分の興味が本当は教育分野にある

と気づき、文学部から教育学部で志望を変えたこともありました。大学入学後のミスマッチを未然に防ぐ意味でも『サクセスタイム』の意義は大きいと思います」(高橋先生)

## 志望を絞りこんだ上で もう一度視野を広げる

「向陵プラン」には、特筆すべき特徴が二つある。一つは、個々の取り組みが有機的に結び付いていることだ。取り組みごとに事前事後指導があるのはもちろん、例えば、2年生の12月に行う「学問研究」は、10月の「向陵セミナー」の事後指導でもあり、12月に始まる「志望理由書」作成のための事前指導でもあるというように、取り組みを関連付けている。個々の取り組みの意義が明らかとなり、生徒も教師も徒労感を感じることなく前に進める。

もう一つは、志望の選択肢の広げ方にある。進路学習では多くの場合、広く社会や学問を見せた後、徐々に具体的な志望校を絞り込んでいく。一方、同校では、1年生で広く社会を見せた後、徐々に興味ある学問へと絞り込ませ、2年生末の「志望理由書」で自分の志望を焦点化する。その上で、3年生ではその大学にこだわらず、同じ目的が達せられる他大学・他学部へと視野を広げさせるのだ(図2)。具体的には、個別面談で生徒との対話を繰り返し、「サクセ



スタタイム」で隣接する諸分野まで視野を広げた後、最終的に入試前の「ケースタディー」で、「センター試験で目標点に達した場合」「達しなかった場合」など、状況別に出願校を考えておき、幅広い選択肢を用意して受験に臨む。

「目的意識を明確にすることは重要ですが、第1志望校にこだわりすぎてかえって視野が狭くなり、本来の目標を見失ってしまう生徒も出てきます。『志望理由書』で明確にした将来の希望や学びたい学問に基づいて、第1志望校以外にもさまざまな選択肢があると気

付かせることが大切なのです」(三文字先生)

「なぜその学問を学びたいのか」という強い問題意識を持っていけば、センター試験の自己採点結果が第1志望校の目標点に届かなかったとしても、前向きな気持ちで第2、第3志望校に向かっているのである。

### 「進路シラバス」と「進路だより」で教師の目線合わせを促す

綿密な指導計画を構築しても、直接指導にか

かわる担任の意識が低ければ、効果は望めない。取り組みの意図を正しく担任が理解し、学校全体で進路指導スキルを高めるために、同校では10年度に「進路シラバス」を作成した。これは、3年間のすべての進路指導を「学力蓄積に関する取り組み」(実力テスト、土曜学習会など)、「進路意識の高揚に関する取り組み」(向陵プラン)、「指導充実に関する取り組み」(学習記録、個人面談など)に分けて、目的と内容を示した資料である。特徴は、「関連する取り組み」の欄を設け、1年生の「社会研究」と「ウインターセミナー」、2年生の「向陵セミナー」と「志望理由書」というように、個々の取り組み同士の連関を一目で分かるようにしたことだ。

「目的とゴールに至るまでの道筋を示すことが、先生方の意欲を高め、徒労感を減少させるのではないのでしょうか。また、『進路シ

ラバス』は、本校の教師ならここまで指導してほしいというスキルの目安でもあります。本校が保証する進路学習のスタンダードであるという意識を教師全員が持って取り組んでほしいと思っています」(高橋先生)

生徒に週1回配布する「進路だより」は、教師間の目線合わせのツールとしても活用している。生徒向けに時期に応じた課題や取り組み内容を記したものが、教師もそれを見れば、生徒が今どういう状況にあり、どのようなアドバイスをすべきかが分かる。

改革に着手して7年。生き生きと進路学習に取り組む生徒の姿を見て効果を実感する教師も増え、取り組みに対する教師の理解は深まりつつある。今後の課題は、取り組みを形骸化させず、いかに次代へと継承していくかだ。

「生徒は年ごとに変わっていきます。3年間の指導計画は整いましたが、生徒を見ずに形にばかりこだわっていたら、すぐに取り組みは形骸化してしまうでしょう。生徒の実態に合わせて取り組みを不断に見直す努力が必要なんです。そのためには、入学時から生徒の進路意識をきちんと把握しておくこと、そして何よりも、なぜ進路学習が必要なのかという『魂』を伝えていくことが大切ではないでしょうか」(穂積先生)

「向陵プラン」の真価は、これからの教師たちの取り組みにかかっている。